

東北芸術工科大学学長就任記念 松本哲男展 — 鼓動する大地 —

会期 二〇〇六年四月一日「土」～四月二〇日「木」
会場 七階ギャラリー、studio144、ガレリアノルド
企画 美術館大学構想室、京都造形芸術大学 Galerie Anbe
協力 日光市、佐野市立吉澤記念美術館

● 山形展ギャラリートーク
『地球をまるごと描く』

講演 松本哲男
日時 四月一日「土」 四時三〇分～二六時

● 京都巡回展

会期 四月二八日「金」～五月二〇日「土」
会場 京都造形芸術大学 Galerie Anbe

● 京都展ギャラリートーク&ライブ

『駆け上がる水—大地・身体・絵画の音域をめぐる—』

対談 松本哲男×鎌田東二（宗教学者／京都造形芸術大学教授）
サックス演奏 姜泰煥
日時 四月二八日「金」 七時～一八時三〇分

松本哲男展 ― 鼓動する大地 ―

駆け上がる水 ― 大地・身体・絵画の音域をめぐる ―

松本哲男 Tetsuo Matsumoto × 鎌田東二 Toji Kamata

滝のダイナミズム

松本 今回、このギャラリーオーブに展示させていただいたのは、私の日本画家としてキャリアのうち、五〇歳から六〇歳までに制作した作品の全てです。もちろん、滝の制作途中、他の作品も描いています。このように巨大な絵画を淡々と描き続ける精神力の持続の大変さを、今、噛みしめています。よく頑張ったなあ（笑）。

今日、改めてこうして私の一〇年間で眺めてみて、「滝」というテーマに向かつて、自分の気持ちを追い込んでいった気迫の原動力は何だったのか、今日は宗教学者の鎌田先生と滝の魅力についていろいろお話ししながら、自分なりに振り返ってみたいと思います。

まず、一番大きかったのは、なんといつでもヴィクトリア・フォールズ「※1」と

の鮮烈な出会いです。当初は恥ずかしな

がらこの巨大な滝がアフリカのどこにあるのか、またどの程度の規模の滝なのかさえ知らないで取材旅行に行きました。そうしたら、地球の割れ目に水が落ちていくのではなくて、逆に飛沫をあげて吹き上がってくるような、強烈なイメージの滝だったので、地球のすごさに圧倒されてしまったのです。その時の感激が、一〇年間も滝を描き続ける原動力になるわけです。

ですから、最初に写生をしたヴィクトリア・フォールズなのに、一〇年間の滝シリーズの中で、完成するのがもともと遅かったのです。というのは、アフリカという野性的な風土と、我々東洋人の血というか自然観には大きな違いがありますよね。現地で地面に這いつくばって巨大な滝を必死にスケッチしながら、大地や水の匂い、太陽の光がまつたく違うので、どうしても思うように描くことがで

きませんでした。悩んで、悩んで…。

ある時に、「俺は東洋人だ。これはアフリカだぞ」と、ギャップを感じながらも絵の上では聞き直って、最終的には東洋人の山水画の血で描いてしまいましたが、東洋的な絵作りといえますか、ある意味では現実の風景ではなくて、スケッチをもとに自分なりに咀嚼した、架空の滝になっているのです。

事実、あそこに有名な『悪魔の喉笛』が、滝壺を覗き込むような視点で描かれています。実際はこのようには見えません。最終的には自分が見上げているような感じで、大量の水が落ち込んでいく姿を、見上げるように描く部分と、逆に上から覗き込む視点を絵のなかに共存させているのです。それで初めて絵に「音」が入った気がしたのです。

鎌田 僕は、今でも年に二回は必ず滝に打たれています。東北芸術工科大学のある山形の湯殿山神社「※2」の、御神体のすぐ下にも有名な滝がありますね。はじめて滝に打たれたのが今から二十五年前ですが、それ以降、日本各地、世界のいくつかの場所で滝に入ってきたのですが、松本さんのこの大きな滝の作品を見た時、僕は『地獄の黙示録』「※3」のロケーションになったフィリピンの川と、その上流の滝での体験を思い出しま

した。
普通、ヴィクトリア・フォールズのよくな大きな滝では滝行は絶対にできませんよ。滝の中に入って行くこうとしても、落水の壁を突き破れない。水流で押し流されるし、暴風雨の時はそのすごいしぶきと風が吹いていて、人間を拒絶する自然そのものの威力というか、エネルギーを持っていきます。フィリピンでは、無理矢理に筏を組んで、筏をロープで引つ張りながら滝に近づいて行きましたら、まさに滝の中の、喉笛の奥には洞窟がありました。その洞窟は奥行き二〇メートル以上はあると思いますが、どこまで続い

ているのかちょっと分からないけれど、その滝の奥まで入って行くためには、流れが落ちている水の壁を突き抜けて行かなければならない。人力では不可能なのですが、手でなんとかロープをたぐりながら、その時は滝の中へと入って行くことができたのです。

松本 『悪魔の喉笛』の一番奥では、イワツバメ「※4」が水しぶきを越えて、滝の中で巣をつくり、子育てをしています。滝の真上から水しぶきをじっと眺めていた時に、ふいにイワツバメが飛んできて、直線的に滝の中へと突き抜けていくのを見たのです。そこに自然のすご

さを感じましたね。一〇センチくらいの小さな鳥が、あの猛烈な水しぶきを越えてしまう。生命の戦いを見たような気がしました。

鎌田 あのヴィクトリア・フォールズの水を、人間がまともに受けたら大変なことになりますよ。一五メートルや二〇メートルの大きい身体で、しかも、ものすごく体重もある巨人であれば、あるいは滝に打たれるのは可能かも知れませんが、一〇センチのイワツバメが、滝、といっても水の穴というか空隙だらけですから、そういう隙間の中にスーッと一直線に入り込んで行って、その中で巣を



松本哲男 Tetsuo Matsumoto

1943年栃木県生まれ。宇都宮大学教育学部卒、日本画家塚原哲夫氏に師事。93年4月～東北芸術工科大学芸術学部美術科（日本画コース）助教授。96年4月～東北芸術工科大学芸術学部美術科（日本画コース）教授。現在、東北芸術工科大学学長。日本美術院評議員。72年日本美術院院友に推挙される。今野忠一氏に師事する。主な受賞に、74年再興第59回院展で日本美術院賞・大観賞。日本美術院特待。83年日本美術院同人。84年芸術選奨文部大臣新人賞。89年再興第74回院展文部大臣賞。93年再興第78回院展内閣総理大臣賞。94年栃木県文化功労賞など。

※1 ヴィクトリア・フォールズ (Victoria Falls)

世界三大フォールの一つ。ジンバブエ共和国とザンビアの国境にある滝。ザンベジ川の中流にあり、最大幅が一七〇メートルと最も深く、滝壺は落差が一〇八メートルもある。

※2 湯殿山神社

（ゆでのさんじんじゃ）山形県庄内地方にひるがる月山羽黒山。湯殿山にある出羽三山神社の一つ。修験道を中心とした山岳信仰の場として、現在も多くの修験者、参拝者を集める。山頂に神社があり、標高は一五〇メートル。

※3 『地獄の黙示録』

（Apocalypse Now）一九六〇年代のベトナム戦争下のジョン・ヤングルを舞台に、一人のアメリカ軍将校暗殺を命じられた大尉が、四人の部下と共に目撃する戦争の狂気を描いた映画。フランス・フォード・コッポラ監督。

※4 イワツバメ

（Delichon dasypus）スズメ目ツバメ科に分類される鳥類の一種。アフリカ大陸とユーラシア大陸に広く分布する渡り鳥。体長一三センチほど。飛びながら昆虫類を捕食する。



つくる事ができるというのは、ある種の逆説というか、生命というものは面白いものだなあと思います。自然が持っているダイナミズムと、陰陽の両方の要素を秘めている。

さきほどのフィリピン滝の洞窟の中は本当に別世界でしたよ。前の方は滝がグアーッと落ちていくのに、洞窟の中は逆に静まった、お母さんの胎内のような世界を中から静かに見ているようでした。この時の印象が僕には非常に強烈で、松本さんの描くような、こういう魅力的な滝を見ると、僕は中に入っているか、洞窟を秘めているか僕は思いますね。そして、吹き上がっていくように風を押し出す、滝を動かしていく風穴がどこかにあって、それが喉笛を奏でるのです。

大きい台風などがやってくると、洞窟が「ビュッ」と鳴ったりしますが、そういう常に巨大な音が入り込んで行く穴がからは、「ビューン」という、また違う音がします。そういうところだけは、『悪魔の喉笛』という名称になって、普通の洞窟とは違う、強烈なエネルギーをもった場所であるかのように、土地の人たちは感じ取ってきたのだと思います。

松本 なるほど。いいこと教えていただきました。あの音は滝の中から響いていたのです。私は『悪魔の喉笛』を生ずる時、あのダイナミックに渦巻くような印象を、どうやって絵に描いて表したらいいかわかりませんでした。しかし、要するに滝が液体だと思っただけではないのです。粒状になって大気中にも飛散した水の流れ、そしてまた水の流れではなく、穴からの見えない風や音の出入りというか、空気が流れを描くように意識を切り替えたなら、どんどん筆が進むようになったのです。

滝の波動／駆け上がる水

鎌田 そもそも滝に向かわれるきっかけはなんだったのですか？ ヴィクトリア・フォールズが最初ですか？

松本 五〇歳の時、パリでそれまでの仕事をまとめた大きな個展を開催して、その後、絵のテーマが定まらず悶々としていた時、「次に何を描くの？」と訊かれて、ふいに、何の考えもなく、「三大フォール」※5「だ！」と突然思いついてしまったのです。そして、アフリカで滝の偉容を目にしてしまったら、この一〇年間の…五〇代の青春はなくなつて

しまいました(笑)。
鎌田 滝とともにあるわけですね。滝とともに去りぬ(笑)。

冗談はさておき、ヴィクトリア・フォールズがあるのはアフリカのジンバブエです。僕の友達であの聖地の、特に石を中心に二〇何年写真撮り続けている男がいますが、ジンバブエには有名な指ピアノ※6があるでしょ？ 大きい胡桃の木の中にそれを入れて、それを反響させて良い音を鳴らせる民俗楽器ですが、その音の感覚も含めて、ジンバブエというのは、非常に繊細で微妙な波動というものを感知する国ですよ。そこに、直感的に行かれたわけですね。

音というのは穴です。さきほど松本さんがおっしゃったような一種の粒子が波動状になって、その粒子と粒子が波にのって空隙をつくる時に初めて音が振動として発生してくる。竹林に行くと、風が吹いて来た時に「サァッ、ザァッ」という音がするでしょう？ それは葉が擦れているわけですよね。その擦れ葉の集合体が「ダァッ」という音になります。これは葉が小さい粒子として擦れているわけです。その擦れと擦れの間、隙間が重なりながら、融合と分裂を繰り返していくのです。

波動を感じるためには、受ける側の「位

※5 三大フォール (Three major falls) アメリカとカナダの国境にある「ナイアガラ・フォールズ」と、アフリカの「ヴィクトリア・フォールズ」、南米の「イグアス・フォール」のことを指す。

※6 指ピアノ・親指ピアノ (Thumb piano) 祭礼や儀式の時に先祖の霊やスピリット(精霊)との交信をするために演奏されてきた神聖な役割を持つ楽器で、オルゴールの原型となった楽器。構造は、鉄の棒をハンマーで叩いて作った平らなキーを、木の板にワイヤーやホルトで締め付けて装着したもの。両手の親指を使ってキーをはじいて弾く。日本では、このような形状を持つ楽器は「親指ピアノ」または「カリンバ」と総称されているが、本場アフリカでは国や地域によって楽器が異なり、ジンバブエでは「ムビラ」という。

写真左
「ヴィクトリア・フォールズ(部分)」



鎌田東二 Toji Kamata

1951年徳島県生まれ。国学院大学神道学博士課程修了。文学博士。宗教哲学者。現在、京都造形芸術大学教授。宗教哲学・民俗学・日本思想史・芸術論など多彩な学問を闊達に横断する。様々なフィールドワークに国内・海外を駆け巡る研究即実践の行動派。学者やアーティストとの幅広い交流をもとに、広く一般に向けた霊性に基づく学問と芸術の探究の場 NPO 法人東京自由大学の運営や伊勢・猿田彦神社「おひらきまつり」など文化創造活動にも取組む。法螺貝・石笛奏者で、ギター片手に自作の歌も歌う自称「神道ソングライター」。主な著書に『翁童論4部作』（新曜社、1988～2000）／『神と仏の精神史』（春秋社、2000）／『神道のスピリチュアリティ』（作品社、2003）／『霊性の文学誌』（作品社、2005）、編著に『謎のサルタヒコ』（創元社、1997）／『ケルトと日本』（角川書店、2000）他。近著に『霊的人間』（平凡社、2006）など。

置」や「距離」が重要です。音の中に入り過ぎて聞こえないし、音そのものが

低・高周波であったり、超音波になったり我々人間には聞こえません。やはり、「波動」といってもいいような、聞く側の身体性も含めた、ある種の一定の感覚の幅の中で捕えられるものですね。

滝の中では、粒子同士がぶつかり合っている時の、様々なモジュールが存在しています。音の飛沫に風が「ビュウツ」と現れることで微妙に変化します。また、雨が降って、雨の水量が大きくなった時も、音はまったく変わってしまいませんよ。しぶきの全体の形も大きく変

わって行く。滝にはとても豊かな音のグラデーションが存在するのです。

松本 確かに、滝の轟きや飛沫から大きなエネルギーを感じますね。ですから私は、その場にある匂いや手で触れる岩や土、水の触感、顔に当たった風や音など、様々な振動を体全身で受け止めて、その記憶を基に、なめ尽くすような気持ちで描くのです。

こういう大きい絵を描く時は、あえて細い面相筆でその空気を描こうと思って、粒子の一つ一つを丁寧に描きま

ます。一つ一つの粒子を、念じながら描いていくのです。果たして伝わるかどうかかわからないのですが。

鎌田 僕は、この大きな絵の近くにいると、本当に匂いのようなものも含めて、自分の感覚が変わっていくように感じますよ。だから、この絵のヴィクトリア・フォールにも、波動を感知するための視線の幅や、画面からの的確な距離が必要で、その一定の位置に立った時に初めて、この作品が持っている全体像や力のよう

なものを、クリアーにキャッチできるような気がします。

松本 それは描き手にもある感覚ですね。ここにこうして座って眺めていると、自分でも素晴らしく見える（笑）。自分のアトリエでは、この絵はこんなに活き活きしていないので。

鎌田 今から一〇年ちょっと前のことですが、深夜二時ぐらいに、那智の滝「※7」に行ったときのことです。その日は土砂降りで、那智の滝の下にある飛瀧神社の奥の所に入って法螺貝を吹いたり、般若心経を唱えたりしていました。そうしたら、自我や音、世界にせよ、そんなものはとても小さいもので、すべてかき消されていくのです。

その時、目の前の那智の滝が、不思議な白い力で上の方へ、本当に上空の方へ

動いていくように見えたのですよ。幻想ではなくて。と同時に、僕は滝に打たれた後、幽体離脱といったら変ですが、三〇センチぐらい身体が浮き立つような状態になったのです。その時、滝が落ちている所から逆流するように空の方へ突き上げていく何かの霊的な力を、私たち人間は転写しているというか、写しているに過ぎないと感じました。

絵画のフォルム、滝のフォルム

鎌田 この絵はどれぐらいの広さのアトリエで制作されたのですか？

松本 宇都宮のアトリエは二二〇畳あります。このギャラリーのほぼ半分くらいだと思います。昨日の搬入作業の時、アトリエで観たものとはまったく違う絵の表情を展示しながら感じていました。なにしろ長大な絵なので、作品を後ろから一二人がかりで持ち上げてもらって、一〇センチくらい横にずらしたり前に出したりしていたら、この絵がこの壁面にピタッと付いていた時よりも、次第に迫力を増していったのが印象的でした。

鎌田 つまり、壁からあえて離して展示した方が、絵に力が出るわけですか？まるで生きているように、観る側の視線

の世界に鍛え上げるには、小さな空気の粒を描いて攻めていく。そういう自然のダイナミズムから伝わってくる波動を、丁寧に丁感しながら、自分なりに咀嚼して描いていかないと、現代の写生というか、自然をテーマにした絵画は成立しないとと思いますね。

鎌田 匂いというのは、平面の中では具体的にどういうような表現になっていくのですか？色彩ですか？形態ですか？気のようなものですか？

松本 先ほどお話しした、その場に充滿している匂いも含めた様々な波動を、常に頭の中でイメージしながら描いてい

の方へ迫り出してくるわけですね。

松本 そうですね。これは壁からちよつと離して、微妙なカーブをつけたことによつて、絵の大きさ、地球の大きさのひらかりが強くなりました。それから、額を取り払った絵そのものが床から自立していますよね。このように座って見ている高さが、私がアトリエで描いている状態「写真1」とまったく同じなのです。こんな展示を、東北芸工大の学芸スタッフが提案してくれて、私とは違う日本画の魅力というか、世界観を引っぱり出されてきたのを目の当たりにして、とても感激しているのです。

鎌田 僕は高校三年生の時に、銀座のテアトル東京で、スタンリー・キューブリック監督の『二〇〇一年宇宙の旅』「※8」というSF映画が封切りになって、すぐに観にいったのですが、その映画館がシネラマという湾曲した画面で。今だったら珍しくも何ともないですけど、音がこちらからこちらまでビューンと回るような画面で、宇宙空間を宇宙船が木星の方に近づいたり、宇宙の青雲が爆発していく様子が描かれていました。今回の展覧会カタログの中で、松本さんも同じようなことをおっしゃっています。が、本当に映像と音の中、まさに宇宙の中に自分が引き込まれていくような孤独

※7 那智の滝（ちのたき）和歌山県那智勝浦町にある滝。華嚴の滝（栃木県）、袋田の滝（茨城県）と日本三名瀑の一つ。滝に対する自然信仰の聖地でもあり、飛瀧神社がある。二〇〇四年にはユネスコの世界文化遺産に登録されている。

※8 『二〇〇一年宇宙の旅』(2001 A Space Odyssey)

世界映画史に残る不朽の名作。それまでのSF映画に対する認識を、根底から覆すような高品質なSFX技術は、後のSF映画全てに影響を与えている。スタンリー・キューブリックが監督。



写真1

を感じ、ポツンと浮いているような感覚を持ちました。この絵も、アトリエから離れて、こういう空間の照明や配置などの微妙なバランスによって印象を変えていくのですね。

それからこの、あえて額縁に入れずに湾曲しながら壁面から迫り出す展示に、滝そのもののフォルムを感じます。僕は学者で、絵の鑑賞については素人目なのですが、額縁のある絵は、「絵の中の世界に入ってしまったみたい」と思うのですが、このように絵の中の世界と外を分けるフレームがないと、イワツバメのように、この身をもって、「絵の中を突き抜けて行きたい」という気持ちになります。この方が、より自然の活力を感じさせてくれますよね。これだけの大きい絵画でも額縁に入れて展示しようとする発想自体が、ヨーロッパ的な風景の切り取り方なのでしょうね。

松本 まったくおっしやる通りで、実は私自身も絵というのは額縁がないと駄目だと思いついていたのですが、学芸員の宮本君が、せっかくなついていた額を全部丁寧に外して、絵をまる裸にしてみましたのです。それを見て、私は最初、抵抗を感じたのですが、いざ展示された姿を見てみると、「なるほどなあ」と感心したのですよ。逆に、自由な広がり

ある空間が出たような気がします。これは、私がアフリカで肌で感じて、アトリエで絵に移しとった「滝」そのものの印象ですね。これまでも他の美術館で展示したことがあるのですが、額縁なしで飾られることによって、違う絵に生まれ変わったような気さえします。それに不思議と東洋的です。

鎌田 遠近感を無理矢理に自然の中に閉じ込めていくような西洋的な視線、そういう窮屈でシステマティックな印象を感じないですよ。とてもゆったりしている。僕は人類の絵画史において、日本や東洋の平面性や自然観がどのように位置づけられ、特徴を持つのか知りませんが、本当に何もない空間の中に、イメージがほんやりと浮き立っている時の方が、遙かにパワーやエネルギーを感じますね。

松本 そうですね。描き手である私自身も、この絵の前に立っていると、鎌田さんがよくおっしやる「聖地のポイント」というのか、しっかりと大地の基軸となる場所から、地球全体を眺めているような気がするのです。

私は今年で六〇歳になりましたが、はじめてアフリカの滝に出会った時の感激と同じスケールで、今度は六〇代なりのテーマを模索したいと考えています。学長を務めるとなると、アトリエで筆をと

| |
|--|
| ギャラリーライブレポート |
| 松本哲男展開催記念 — 鼓動する大地 — — 大地・身体・絵画の音域をめぐる — |
| 姜泰煥 (サククス演奏) |

二つの波紋

東北芸術工科大学の宮本武典から、『三大瀑布』と即興音楽とをコラボレートさせるというアイデアを聞き、即座に思い浮かんだのが韓国のアルト・サククス奏者の姜泰煥だった。画家・松本哲男がデッサンをしながら聴いたという、大瀑布の放つ轟音のイメージ。姜泰煥が時折みせる烈しいタングング、地下水脈を汲み上げてでもいるかの様な強靱なサーキュラー・ブレス(循環呼吸奏法)。それらのイメージが自然と重なったのだ。

姜泰煥はサーキュラー・ブレスやマルチフォニック(重音奏法)等の超絶技巧と、韓国の伝統的音階とを融合させた独創的なインプロヴィゼーション(即興演奏)で知られ、その表現は長い年月を経た洗練され、アジアの孤峰とさえ言える唯一無比の存在である。松本哲男についても、その作品についても予備知識の無かった私は、第六感的に姜泰煥を提案したものの、その時点では些かの危惧も抱いていた。即興演奏では、空間の音響はもちろん、その場のアトモスフェアから少なくない影響を受けることにある。

る時間は少なくなりそうですが、厳しければ厳しいほど、きつと絵は良くなると思っていて、地球上にまだまだある、人間の魂を奮わせるような素晴らしい風景に出会いために精進していきたいと思っています。

鎌田 それでは最後に、松本さんが東北芸術工科大学の学長に就任したことから、この京都における「松本哲男展―鼓動する大地―」開催のお祝いと、東北芸術工科大学がこれからますます「縄文」や「東北」などのキーワードを駆使しながら、日本の、あるいは世界の状況に新しい息吹と想像力を伝えてくれますことを祈念し、石笛いわぶえと法螺貝「写真2」を奉奏したいと思います。(朗々)

(構成＝美術館大学構想室)

場合によってはそれらとの相互作用から音楽が創り出されてゆく。他分野とのコラボレーションが多い所以だ。しかし、同時に、現れた音そのものが自律したアイトであり、別の事象やイメージを音で表現しようとすることはない。それは、基本的に具象的表現との相性があまり良くないことを意味する。

しかし、画家のアトリエを訪問する機会を得たことで、私の危惧は、あつげなく霧散した。その壁面には『ヴィクトリア・フォールズ』が立て掛けられ、現場で描き上げられたデッサンが床に並べられた(その細密さから、如何に長時間に渡り轟音に曝されて来たかが解る)。湧き出した雲の様な水飛沫を基調とした、その巨大な画面をほんやりと遠くから凝視していると、(封じ込めても、封じ込めても弾け出す様な)無数のミクロの張力によって、次第に画面が振動してくるような感覚があつた。現場での丹念なデッサンに基づく滝の絵でありながら、滝を描くという手法を持って表現された「何か」。それは大地の鼓動であり、人間・松本哲男の鼓動である。寺内久(Mitsuru Terachi)主宰/ライブ用フレイヤーから転載)



姜泰煥 Kang Tae Hwan

1944年ソウル出身。韓国が生んだ世界的なサククス奏者。類をみない様々な技法の中でもふたつの音域を同時に吹いてハーモナイズさせる「マルチフォニック奏法」や、呼と吸を同時に行う超長音の「サーキュレイト奏法」は、自国の伝統スケールをも織り込んで深い思想を表現する。主な来日公演として、90年4月、横浜「Bay'90 フェスティバル」に、横浜市長の招待により高田みどり(perc.)とのデュオで共演。9月、福岡市「日韓 Jazz Session'90」に福岡市商工会議所の招きにより、山下洋輔とのデュオで出演。11月、「東京国際演劇祭'00」の中「日韓行為芸術祭《交隣》」に招かれて出演。その他、91年5月にはメールス・ジャズ・フェスティバルに再び招かれる。6月、韓国・仁川市長の主宰する「Art Festival」に招かれて出演。92年秋、ロシアのアルハンゲリスク・ジャズ祭、リトアニアのヴィリニウス・ジャズ祭、そしてラトヴィアのリガ、モスクワでのコンサートと旧ソ連をツアーした。96年8月、富山県利賀村の「国際演劇祭」に招かれ、コンサートを行なう。主なCD音源は「ASIAN SPIRITS」韓国盤(96年)、「SEVEN BREATH」NEWS(02年)、「I THINK SO」IMA(02年)など。



写真2